



ぶぎん海外駐在員通信 ⑨

香港×深圳が形成する越境経済圏について

武蔵野銀行市場国際部 海外進出支援室（千葉銀行香港支店出向）

本橋 泰斗

武蔵野銀行は国際業務を推進する目的で、シンガポール、バンコク、香港に行員を駐在・派遣しています。

本連載は現地行員によるリレーエッセイとして毎回、現地の生活事情やトピックスをお伝えします。

はじめに

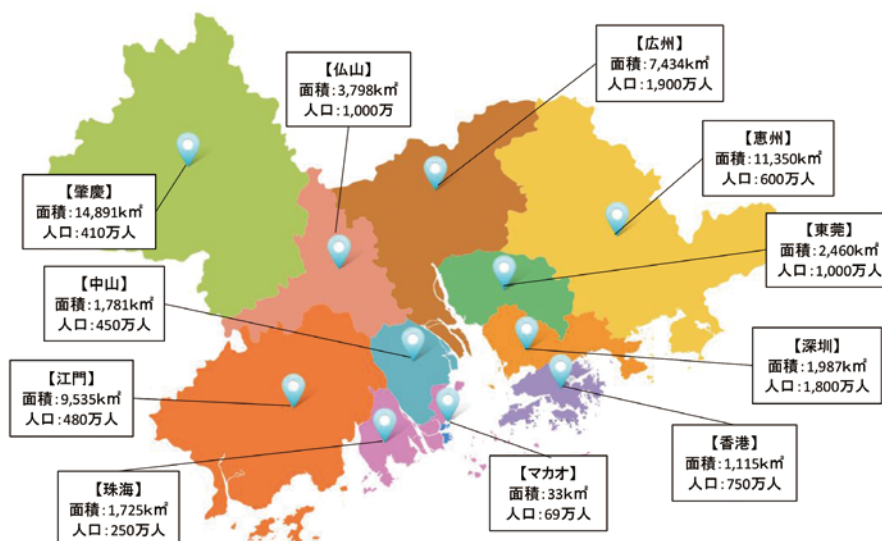
香港と深圳は、中国南部の珠江デルタ地域に位置する隣接都市であり、高速鉄道を利用すれば両都市間の移動時間は20分程度に過ぎません。近年、両都市は地理的な近接関係を越え、経済・産業の両面で一体化が進む都市圏として存在感を高めています。

この動きを理解する上で重要なのが、「グレートベイエリア（Greater Bay Area：GBA）」構想です。GBAは、香港、マカオ、広東省の9都市（広州、深圳、珠海、仏山、中山、東莞、惠州、江門、肇慶）を一体的な経済圏として発展させる構想であり、製造、テクノロジー、金融、物流といった分野の連携強化を通じて、国際競争力の高い都市圏を形成することを目的としています。

香港は、国際金融センターとして長年培われてきた金融インフラ、法制度の透明性、外貨取引や資金調達の利便性を強みとする都市です。多国籍企業や金融機関が集積し、アジアにおける地域統括や国際ビジネスの拠点として重要な役割を果たしてきました。一方で、産業構造の高度化や成長分野の創出が課題となっています。

これに対し深圳は、改革開放以降に急成長したテクノロジー都市であり、通信、EV、AI、ドロー

GBA 地図（人口は2024年末時点）



出所：香港政府「Greater Bay Area」ホームページより作成



河套協力区、香港園区が開園

香港と深圳が境界エリアで共同開発する「河套深圳・香港テクノロジー・イノベーション協力区」の香港園区が2025年12月22日に開園しました。中国本土企業を中心に60社超が既に入居しており、香港園区と深圳園区を結ぶ連絡橋も同日着工し、2027年までの完成を目指しています。



出所：「河套深港（深圳・香港）科学技術イノベーション協力区」の香港園区発展要綱

ンといった分野で世界的企業を数多く輩出しています。研究開発から試作、量産までを短期間で実現できる産業集積を背景に、スピード感のあるイノベーションが日常的に生まれている点の特徴です。

GBAの枠組みの下、両都市はそれぞれの強みを生かし、香港は金融・国際ビジネスの中核、深圳は技術・産業の中核として役割分担を明確にしつつあります。本稿では香港駐在の視点から、この越境経済圏の実態と日本企業にとって参考になる情報をお伝えします。

深圳に集積する世界的企業と産業クラスター

深圳には、世界的に知られる企業が数多く本社を構えています。通信分野ではHuaweiやZTE、IT・プラットフォーム分野ではTencentが存在感を示しています。Tencentが提供するWeChatは、決済や情報流通の基盤として中国国内で広く利用されています。

EV分野ではBYDがトップクラスの販売台数を誇り、深圳市内では同社製のEV車や電動バスが日常の移動手段として定着しています。また、ドローン分野ではDJIが民生用・産業用ともに世界市場で高いシェアを有しています。

深圳の最大の特徴は、研究開発、部品調達、試作量産までを都市内で完結できる点にあります。製品化までのスピードが非常に速く、新技術の社会実装が短期間で進む環境が整っています。このため、深圳は単なる製造拠点ではなく、技術検証や共同開発の拠点としての重要性を高めています。

日本企業にとっては、深圳企業との協業を通じて、製品開発のスピード向上や新技術の取り込みが期待できる一方、現地のビジネス慣行や契約実務への理解が不可欠となります。

香港と深圳を結ぶ経済的連動の進展

近年、深圳企業が香港を活用する動きが一段と強まっています。具体的には、香港での銀行取引、外貨決済、資金調達、国際展開のための拠点設置などが挙げられます。深圳企業にとって、香港は引き続き国際ビジネスの窓口として重要な役割を果たしています。

香港側でも、深圳との連動を意識した動きが見られます。深圳と一体となった産業・研究拠点の形成を視野に入れ、北部を中心とした都市開発が進められています。越境通勤や日常的な往来も増加しており、両都市を跨いだ就労・生活スタイル



自動運転タクシーとその社内の様子

は珍しいものではなくなっているのです。

こうした流れで、「香港で金融・管理、深圳で開発・製造」という役割分担がより明確になり、両都市は一体的な経済圏として機能し始めています。

GBA で進む最先端技術の社会実装

GBA では、最先端技術が研究段階にとどまらず、実際の生活やビジネスの現場で使われはじめています。特に深圳では、新技術を社会実装する動きが活発であり、そのスピード感は現地を訪れると強く実感します。

代表的な例が自動運転です。深圳市内の一部エリアでは、自動運転タクシーが商業運行されており、アプリを通じて無人車両を配車することができます。実証実験の段階を超え、移動手段の一つとして受け入れられつつある点は、他地域と比べても特徴的です。

また、ドローンの活用も進んでいます。物流や医療分野では、短距離・緊急性の高い輸送手段と

して実用化されており、都市部ではドローンが飛行する光景も珍しくありません。EV やスマート交通、キャッシュレス決済も日常生活に深く浸透しており、新技術が社会に定着するまでの時間が非常に短い点が深圳の特徴と言えます。

企業実務から見たメリットと留意点

香港と深圳を組み合わせた事業展開は、日本企業に多くの実務的メリットをもたらします。香港は国際標準に近い法制度や税務環境が整い、外貨取引や資金管理がしやすいため、銀行口座や外貨決済、グループ内資金管理を集約する拠点として有効です。

一方、深圳は技術人材が豊富で製品開発のスピードが速く、研究開発から量産までの距離が近い点が強みです。EV、AI、電子部品、医療機器などの分野では、現地企業との共同開発による付加価値創出が期待できます。

こうした役割分担を前提に「香港で管理・金融、深圳で開発・製造」という体制を構築することで、業務効率の向上が期待されます。実際に、香港を地域統括拠点、深圳を技術拠点として活用する企業も増えてきています。

ただし、両地域を跨ぐ取引では税務・会計処理が複雑化しやすく、取引価格設定や知財の扱いなど事前整理が不可欠です。ビジネス慣行も異なり、深圳ではスピード重視、香港は契約内容やリスク管理を重視するため、両者の調整が求められます。



IT システムやデータ管理も越境利用を前提に設計する必要があります。

資金管理の集約先としては、外貨取引や国際決済に強い香港が適しており、深圳で発生する開発費や運転資金も香港側で統括することでリスク管理がしやすくなります。外貨建て取引やグループ内取引が関わる場合は特に香港をハブとする意義が高まります。

このように、香港の金融機能を活用しつつ資金管理や決済スキームを整理することが、GBA での事業を安定的に進める基盤となり、初期段階からの体制整備が中長期的な運営の円滑化につながります。

今後の展望

今後も、深圳を中心とした技術革新と、香港が有する金融・国際ビジネスが結びつく流れは継続すると見られます。特に、EV、AI、医療機器、半導体関連装置、環境、省エネ分野など、日本企業が強みを持つ分野では、深圳企業との協業や技術連携の可能性は引き続き大きいと言えます。

日本企業にとって重要なのは、GBA を単なる海外市場の一つとして捉えるのではなく、「複数の都市が機能分担する一体型の経済圏」として理解することです。香港は資金管理、外貨決済、契約管理といった管理機能を担う拠点として位置づけしやすく、深圳は開発・実行拠点として高い機動力を発揮します。両都市の特性を踏まえた拠点配置は、事業効率の向上やリスク管理の観点からも有効です。

また、既に中国やアジア地域で事業展開を行っている企業にとっても、GBA を軸にした拠点再編や役割見直しは検討に値します。従来は別々に運営していた管理機能と開発機能を整理し、香港と深圳を連動させることで、事業運営の効率化につながる可能性があります。

香港駐在の立場から見る限り、GBA では日々新しいビジネスモデルやサービスが生まれており、現地の変化を継続的に把握することが重要です。日本企業にとっては、こうした動きを踏まえなが



ら、自社の事業戦略にどのように生かせるかを検討することが、中長期的な競争力強化につながると考えられます。

おわりに

本稿では、香港と深圳を中心として GBA の動きについて、現地で見聞きしている内容を交えながら整理しました。香港と深圳は、制度や文化、街の雰囲気も異なりますが、実際に行き来してみると、ビジネスの現場ではすでに一体的に動いていることを実感します。

特に深圳では、自動運転やドローン配送といった最先端技術が、実証段階を超えて日常のサービスとして使われ始めており、新しい技術が社会に浸透するスピードの速さには驚かされます。こうした変化を現地で体感すると、GBA は単なる政策用語ではなく、実態を伴った経済圏として動いていることが分かります。

日本企業にとって GBA は、すぐに進出や投資を判断すべき市場というよりも、「今、何が起きているのか」を継続的にウォッチしておく価値のある地域と言えます。香港を拠点としながら、深圳の動きを知ることで、将来の技術展開や技術活用のヒントが得られる場面も少なくありません。

今後も香港駐在の立場から、現地で感じた変化や実務に役立つ情報をお伝えしていきたいと考えています。本稿が、皆様に GBA を身近な存在として捉えるきっかけになれば幸いです。